

### 3. 多職種を交えたハンズオントレーニングを実施して

熊本地域医療センター 内視鏡検査部

○西村美寿穂、相浦 勇太、杉本 慎治

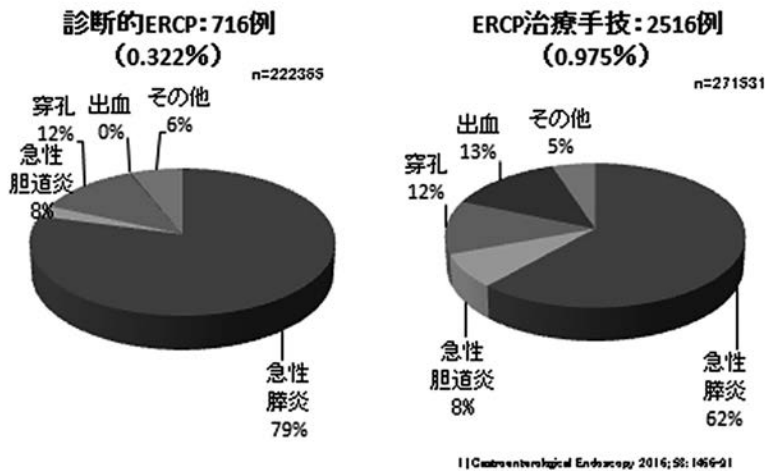
松尾ひとみ、淡路 誠一、池上 慎一

#### 【背景】

内視鏡的逆行性膵胆管造影法（以下ERCP）における偶発症は、消化器内視鏡関連の偶発症に関する第6回全国調査報告によると、治療手技関連が0.975%と診断的ERCPに比べ高い（図）。治療を伴うERCPは、時間の延長や複雑な治療操作などの因子が増えることにより、診断的ERCPに比べて偶発症発生率が高くなると考えられる。

#### ERCP関連における偶発症の比較

第6回全国調査報告<sup>1)</sup>



#### 【目的】

治療における偶発症のリスクを踏まえ、検査時間の短縮を図るためにも治療過程を予測した直接介助は重要であり、医師・内視鏡技師・看護師が連携した治療内視鏡を実施することが大切である。

今回、他職種の手技を体験するため十二指腸内視鏡や処置具操作を学ぶ機会を得ることができ、各職種の役割を振り返り、今後の安全な治療内視鏡につなげられる結果を得たので報告する。

#### 【方法】

臨床に近い状態で十二指腸内視鏡操作が行える体感モデルを使用して、カニューレシヨ

ンやガイドワイヤー操作、ステント挿入や採石など治療内容に伴ったトレーニングを行った。

終了後、今回のハンズオントレーニングで学んだこと、今後多職種間で行いたい勉強会の内容についてアンケート調査を行った。

### 【結果】

(ハンズオントレーニングで学んだこと)

医師は、様々な処置具に触れて、特性を知ることができた。内視鏡技師が行う直接介助の難しさがわかった。

内視鏡技師は、十二指腸内視鏡操作や処置の難しさがわかった。偶発症のリスクを最小限にするために治療過程など予測した直接介助を行い、確実な処置具操作を求められていることがわかった。

看護師は、機器や処置具に触れることができ、処置内容や処置具の構造が理解できた。医師や内視鏡技師は緻密な作業が必要であり、画面に集中しなければならないことが実感でき、患者管理の大切さや予測した薬剤準備などの必要性を学んだ。カテーテルやガイドワイヤー操作の難しさがわかり、三位一体となって協力していくことが大切と感じたという回答であった。

(今後行いたい勉強会の内容)

内視鏡的粘膜下層剥離術など、多職種が関わる治療内視鏡の体験型勉強会の開催を希望する意見が多数であった。

### 【考察】

治療手技の難しさが実感でき、各職種が日頃行なっている役割を振り返り、必要なことを見直すことができたと考える。多職種で行なうハンズオントレーニングは、情報や知識を共有できる良い機会であるとともに、チームワークの向上が図れ、安全な検査治療に繋がると考えられた。

### 【結語】

内視鏡検査の様々なリスクを踏まえ、安全で質の高い検査治療が遂行できるように、今後も多職種を交えた体験型勉強会を定期的に開催していきたい。また、今回の偶発症のデータを再考し、直接介助の技術を磨き、偶発症低減に向けて取り組んでいきたい。

《利益相反：無》

**【参考文献】**

- 1) 消化器内視鏡関連の偶発症に関する第6回全国調査報告.日本消化器内視鏡学会,  
Gastroenterol Endosc 2016;58:1466-91.

**【連絡先：〒860-0811 熊本市中央区本荘5丁目16-10 TEL：096-363-3311（代表）】**